

## B 教育課程に関する研究

### 必修クラブとその周辺

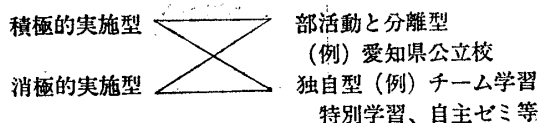
高森 充 都 築 亨 倉田 有 邦  
杉山 光 男 酒井 為 久 田中 裕 巳

#### I. 教育課程における位置づけと問題点

##### (1) 教育課程への位置づけのパターン

必修クラブ活動が新学習指導要領によって、中学校は昭和47年度から、高校は48年度から実施に移されつつある。しかし、その法的基準性、クラブ活動の理念、実施に当たっての条件整備の問題等、現場では意見の対立があるし、多くの学校では試行的状態の中で苦しんでいるのが実情である。従って、教育課程への位置づけは安定的とはいえない。

ここで、教育課程への位置づけのパターンを次のように簡単にまとめてみた。



A 授業時間帯組み入れ型

B 学年・学校行事移行型

(例) 学年合宿、学年行事、校外学習等で代替(本校でも臨海・林間その他の行事について必修クラブ代替問題を検討したが大勢は否定的であった。)

C 課外クラブ代用型

本校では、昭和38年度から全入制クラブを生徒会活動の問題として実施してきたので、45~46年度の校内の論議では課外クラブ代用の意見が多かった。それをなぜ授業時間帯に組み入れ、部活動と分離型を採用したかの経緯は次節にある。

D 指導要領無視・実施不能型

私立の大規模学校や特定の府県に見られる。因みに第15回高校教育研究大会、生活指導部会('73.10月26~27日)の参加校50校中、完全実施38、形式的実施6、実施せず6の結果が報告されている。

##### (2) 学校教育本質観の対立と必修クラブ

教科の場合と異って、クラブ活動のように、本来、生徒の自主的、自発的、自治的活動に依拠する教育活動の領域について、全員必修制(しかも指導要領で画一的に実施すること)の是非については、教育観や政治的立場とも絡んで意見は鋭く対立している。

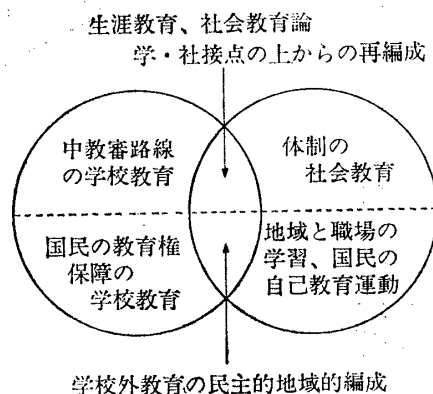
例えば、日教組の教育制度検討委員会の第3次報告('73.7)はクラブ活動を「生徒の自治的諸活動」の

領域として、学習指導要領の「クラブ必修」制は否定されなければならないとしている。さらに従来は学校行事として行われてきた夏休みのプール、臨海・林間学校を再検討すべきだとし、いわゆる労働時間短縮、学校5日制、教職員の週休2日制要求とからめて、「学校外教育」の新たな編成を提案している。

一方、学校5日制や公務員週休2日制論議との関連でみると、現場での論議や要求よりも、むしろ資本や官側の論議が先行しているきらいがある。現場では、例えば従来の無定量的な部活動指導や休日における対外試合の引率、学校行事の過大な負担等の問題は解決されていないし、学校5日制問題にかかわる教育課程の抜本的精選、再編成の解決は容易ではない。

##### (3) 部(課外クラブ)の学校外教育化、社会教育移行論の問題点

部活動——特にその勤務時間外や休日の指導については日教組教育制度検討委員会は「学校外教育」の方向で考えていることは先に述べたが、それと形式的に類似するものとして、官側では社会教育移行論がある。例えば、社会教育審議会青少年教育分科会の中間報告「在学青少年に対する社会教育のあり方」(48.8)はその方向の一端を示している。しかし、両者の政策的立場はするどく対立している。その図式をあげると次のようになる。



しかし、最大の問題は学習やクラブ活動の主体者としての生徒の立場とその活動の保障を軸に現場の実践が論議されなければ、クラブ活動の将来に明るい展望はないといわざるを得ない。(高森 充)

## Ⅱ. 全入クラブ実施に際しての問題点

### (1) 本校における48年度の実施状況

紀要第18集で報告したように、本校では、クラブの性格について若干の本質的論議を棚上げしたままで、とにかく今年は週34時間の授業時間内に位置づけ、その1時間に高校1年より中学1年までの4個学年同時にクラブ活動を行ない、その実施の過程の中で、事実認識にもとづいて、クラブの性格の固定化、共通理解を得る方向をとってきた。

教官全員がどれか1クラブの顧問をひきうけるという前提で(同じ時間帯で高校の2, 3年は各担任教官の担当する授業と、その担任教官はクラブ顧問とはなれないが)顧問を引きうけてよいクラブをあげ、それに基づいて、生徒全員に所属クラブの希望をとるということで、本年度のクラブの成立をはかった。

1) 教官の顧問希望クラブ(数字は希望した教官数)  
ソフトボール(7)卓球(5)バドミントン(2)  
水泳(冬期ハンドボール)テニス(2)バレーボール(2)フオーク・ダンス, 体操, バスケッ・ボール, サッカー, 軟式野球, 弓道, 万歩, 奉仕作業, 園芸, 郷土誌(2)読書(3)

科学試を追試するクラブ, 机上旅行, 仏像の見方, オーディオ, プラスバンド, 演劇, 合唱, ギター, 茶道, 美術, コンピューター, 箏曲, 折紙,

2) 生徒の希望(数字は希望者数)

ソフトボール(73)卓球(39)バドミントン(37)  
水泳(32)バレー・ボール(36)バスケッ・ボール(20)万歩(12)園芸(3)読書(8)科学史(9)旅行プラン(30)オーディオ(20)茶道(15)美術陶芸(19)コンピューター(21)現代史(5)ギター(14)公害研究(3)

成立したクラブは前期18, 生徒総数は約400人であり, 1クラブ当たり平均員数は23人になる。

当初, 月曜日の第6限をクラブ活動の時間にあててとにかく発足したのである。

### (2) 実施に際しての問題点

既報のように本校では昨年前半期には積極的なクラブ肯定論はそれほどなく, それまでの(本校の)全入制クラブを移行することで足りるとする一元的理解をも含めて, 現在の学校教育の一般的状況の中で, せめて週一時間でも「教師, 生徒の接触を密に」し, 共通の趣味関心をもとに「アソビ」的な時間があつてもよいのではないかという消極的支持論をベースにして発足し, その実施過程の中で, 自然にクラブの性格が固まってくるのを待つという方策をとった。

その態様は, 後述の教師, 生徒のクラブについての意識でも評価できるが, 一般的に言えば「たのしく」「1時間では短い」ほどであり, 部活動に参加して

いない生徒にとっては唯一の息ぬきの場になっているとも考えられる。

ただ, 学校教育の場の中に, 興味関心をベースとし楽しみだけを唯一の学習目標とする時間をとらねばならないのは, その事自体教育の崩壊状況の反映でもあろうか, 知育というよりは受験のみを目標としている普通科の一般的状況, 部活動の崩壊, 生徒会自治活動の分裂, 停滞, 教師生徒の人間関係の喪失, 教育の機能自体の分断化を嫌応なしに認めねばならないとしたら, 趣味関心を唯一のつなぎ目として学校教育の再建をはからなければならない。できるならばそのつなぎ目から, ただ遊びだけでない青春の一時期についての貴重な体験を把み取らせる様に指導するのが今後のクラブ指導の要諦になると思う。

今二, 三のクラブについてのメリット, デメリットをあげておくと,

①昨年までの保護者会での話題, そして生徒の学校生活の悩みの最たるものは勉強とクラブとの両立ができないということであった。それが今年は全くないということは全入クラブ, したがって部活動非強制の一つのメリットかもしれない。

②時間が短かすぎること, 週1時間では何もできないこと, 等の問題点は, 1つの案としては隔週2時間のクラブ活動の時間をおくこともできるし, ゆくゆくは週2~3時間とすべきかもしれない。

③当初月曜の6限のクラブを4限に変更したのは, S.Tを6限にとっている本校では, たださえ準備や後始末に時間を要するのにS.T後再び部活動に入る生徒も多く, 非能率的であると判断したからである。本年の研究協議会で, たださえエスケープする生徒の多い実学科生徒に6限のクラブ活動は考えられないという発言もあったのは, 本校の甘さを指摘されたものとして無視できない。4限もしかし妥当な時間帯とはいえないと考えられる。

④財政上の問題一応は旅費そして大学よりの厚意的な予算計上を得て発足したが, 公立校でさえ県費+国費援助が, □×クラス数, 平均60万円(愛知県)の公費支出がなされているのに, 国立校のクラブ費10万円は僅少にすぎるといえよう。

⑤部活動とのかかわりについて問題は大きい, その評価は後日にまらたい。(都築 亨)

## Ⅲ. アンケート結果にあらわれた 必修クラブについての 生徒・教師の意識

本年度より実施している必修クラブは昨年度からたびたび論議的となり, その内容や本質について完全なコンセンサスを得不いま実施時期を迎えたもので

必修クラブとその周辺

ある。したがってある程度時期を経た現在、活動の主体である生徒と、それを担当する教師が、それぞれどのような意識でもって受けとめているかを調べ、今後の参考にしたいと考えた。

調査の対象は、現在必修クラブを実施している中1から高1までの生徒全員と、教官全員である。

(1) 生徒対象のアンケート結果

問1. あなたは現在の必修クラブについてどのように感じていますか。

	高1男	高1女	中3男	中3女	中2男	中2女	中1男	中1女
大いに満足	3	9	5	2	3	2	12	3
だいたい満足	21	14	11	14	20	8	7	15
ふつう	19	15	12	5	14	18	12	13
やや不満	16	12	10	14	8	7	4	11
大いに不満	17	3	8	2	2	1	5	0

満足とか不満とか言っても、その内容や質にはかなりの相違があろう。ともかく上級になるほど不満の者がふえている。しかし昨年度行なった、部活動についてのアンケートの結果に比べると不満の者は減少している。昨年までの全入部活動が形骸化していたこともあるし、従来からの部活動と今回のクラブ活動とでは期待の度合いが質的にも量的にも違うためであろう。

問2. あなたが不満に思う理由は（上の問に不満と答えた者だけ）

	高1男	高1女	中3男	中3女	中2男	中2女	中1男	中1女
なまぬるくて物たりない	10	4	10	5	3	3	0	4
やりたいクラブがない	14	9	9	3	5	6	3	4
きつ過ぎる	3	1	0	0	0	0	0	0
人数が多過ぎる	8	4	8	11	2	3	4	2
男女または学年に偏り	2	0	0	1	0	1	1	1

その他、雰囲気が入らない・先生の指導がない・時間が少ない・中高生の仲がうまく行かない。

総じて、もっと充実した活動を望んでいると思っただろう。自分のやりたいクラブがないというのは小規模校のこと故、ある程度仕方ないことであろう。なまぬるいという指摘は、一つには部活動との差異をはっきり認識していないこともあり、また一方、教官の指導体制への問題を投げかけたものともいえる。人数が多過ぎることについては、生徒の希望を容れて無理に人数調整するのを避けた結果でもある。

問3. 活動時間について

①時間数

	高1男	高1女	中3男	中3女	中2男	中2女	中1男	中1女
週1時間でよい	23	17	10	13	10	19	6	24
週2時間(以上)やりたい	50	33	35	24	37	17	33	17
無答	3	3	1	0	0	0	1	1

② 時間帯

1週に2時間またはそれ以上を望む者が、1時間でもよいとする者の2倍に達していることは、クラブ活動に対する期待がかなりあることを表わしているとみてよからう。問1で、現在のクラブに不満を表わしている者で2時間以上の活動を望んでいる者も多い。時間帯では現在通りの第4限目と、第1学期にやっていた第6限目とで支持率はほぼ半々、結局どちらにしても大差なしといったところ。

問4. クラブ担当の先生について

	高1男	高1女	中3男	中3女	中2男	中2女	中1男	中1女
コーチ、指導などして生徒をひっぱって行ってほしい	19	15	17	22	14	20	10	26
助言者・相談役になってほしい	24	28	11	8	22	9	9	12
生徒の自主運営にまかせてほしい	26	6	18	5	12	6	20	1
無答	6	2	0	2	0	1	1	3

その他、「生徒と対等に」というものが高1に3名。

教師の指導のもとにというのが、今回の必修クラブに関しての論議のポイントの一つであるが、生徒はそのことに関しては、さほど重大には考えていないようである。女子の方が、教師の指導に対する期待が大きいことがうかがわれる。学年差はさほど目立たないが、今後高校上級学年になるにつれて、自主運営を望む傾向がふえるのではないと思われる。クラブの種類によって立場は異なるであろう。

問5. 部活動との関連

① 入っている部とクラブの関連（文化系と体育系）

部—クラブ	高1男	高1女	中3男	中3女	中2男	中2女	中1男	中1女
文—文	9	16	1	3	0	5	6	5
文—体	4	6	1	1	0	1	2	1
体—文	16	16	4	6	15	18	6	20
体—体	30	14	25	17	15	4	19	8
なし—文	8	0	6	1	8	5	2	6
なし—体	7	1	6	8	9	2	3	2
不明	2	0	3	1	0	1	2	0

部活動では、例年、男女共に体育系の方が人数が多い。自由参加となった今年は、中学における文化系部の人数減少が目立っている。従来、あまりやる気のない者が多くいたということであろう。尚、高1の場合、部不参加者は約14%であり、数年前の部全入だった頃と比べると、文化系体育系共に参加率がへった。

② 全入か希望参加か

部-クラブ	高 1 男 女	中 3 男 女	中 2 男 女	中 1 男 女
全 - 全	14 4	9 3	3 4	10 7
全 - 希	3 0	3 0	1 0	0 2
全 - なし	2 1	0 0	1 1	0 0
希 - 全	38 35	20 29	30 24	17 26
希 - 希	16 9	10 3	8 4	12 7
希 - なし	2 2	1 0	0 0	0 0
なし - 全	0 1	1 1	3 0	0 0
なし - 希	0 0	1 0	0 0	0 0
なし - なし	0 0	0 1	0 1	0 0
不 明	1 1	1 0	1 2	1 0

部とクラブの関係については、現行通り、部は希望参加、クラブは全入をよしとする者が、どの学年でも過半数を占めているが、半面、両方とも希望参加を望むものと、両方とも必修全入を望むものも、無視できない比率を占めている。

部全入を望むものは全体の18%を占め、一方、両方とも希望参加の意見を含め、「何もやらない」自由の余地を認めようとする意見のものが20%に達している。昨年度までは部全入のたてまえをとっていたことに対し、一部の生徒からかなり強い反対の声が出ていたことをあわせ考えると、考え方は多種多様であるといえる。部を自由参加にしたため、人数不足や意欲低下を憂える声もある。どちらかといえば運動部に多い。とはいえ、一応、最大多数のものに満足に行くのは、現行通りのやり方であろう。

(2) 教官対象のアンケート

問1. 必修クラブについてどう思いますか

- ア、生徒が一時間を楽しくすごせればそれでよい。
- イ、基礎的能力を身につけさせたい。
- ウ、部に近い水準にまで持って行く。
- エ、興味を喚起して持続的に学んで行くようにさせたい。
- オ、その他

ア7 イ5 ウ0 エ17 オ3

必修クラブの目的、要求水準等に関しては、文化系担当者には「興味の喚起と持続的な学習を指向する傾向が多く、体育系担当者には「楽しくすごさせる」ことを目指す傾向が多い

問2. 担当クラブ指導の準備の為毎回平均どの位時間

を必要としますか (教材研究、準備などを含む)。

	文化系	体育系	計
準備時間なし	3	4	7
10分前後	5	4	9
30分前後	0	2	2
1時間前後	0	7	7
それ以上	0	1	1

教材研究準備等の時間については、体育系が「10分前後」に集中しているのに対し、文化系では「なし」から「1時間以上」に至るまで差が大きいことが目立つ。指導計画に関しては、「クラブ員の自主性」をどう位置づけるか、という教官各自の指導方針の相違が回答のバラツキとして表われた。

問3. 必修クラブの将来に、どの意見を支持しますか。

- ア、授業時数、授業日数削減の方向の中で、必修クラブを時間割の中に入れるのは無理だ。
- イ、理念的にみて必修クラブは廃止して、課外クラブへ、さらに学校外教育活動(社会教育)の充実の方向へ行くべきだ。
- ウ、授業日数削減の方向や、課外クラブの学校外教育移行化の方向の中では、逆に時間割内でのクラブ活動はその重要性を増して行く。

必修クラブの将来については「今後その重要性を増して行く」という意見が過半数の支持を得ている。しかし、「理念的にみて必修クラブは廃止」という意見がそれに近い「その他」の2名も入れれば、実質9名に支持されていることは注目される。

その他、今回は数値をあげることは省略するが、体育系では施設が、文化系では用具が足りないこと、体育系のいくつかのクラブでは人数が多過ぎること、文化系のあるクラブでは少人数の結果、男女・学年の偏りがあること、などが問題点としてあげられている。

ともかく、はっきりとした合意に達しないうちに発足したものであるが故に、実際の指導方針態勢にかなり大きな相違がみられることは当然のことといえよう。問題は、この相違を、クラブの多様性ということでそのまま認める形で進めて行くか、それとも、何らかの共通した理念を求め、それに基いた規準を作成する方向に進めて行くべきか、ということである。いかに多様性を認めるにしても、クラブの存在意義を認めるか否かで分裂してはそれだけで意義を失うことになりかねない。細かい内容はさておき、何らかの形で意義あるものに育てて行くために、大まかな形での合意に達することは不可能ではあるまい。今後も話し合いを重ねることが必要であろう。(倉田有邦)